

博士論文要約：「芸術への参与を動機づける社会的条件——1980年代旧東ドイツにおけるアンダーグラウンド文学の成立条件についてのシステム理論に基づく芸術社会学的分析——」

矢崎慶太郎

本論では、意図やメッセージが明らかではないような芸術作品に人々が参与する（制作・鑑賞する）のはなぜなのかということの問題とし、このことを明らかにするために、1980年代の旧東ドイツにおいてアンダーグラウンド文学がいかにして成立したのか、その社会条件を研究した。

第1章では、既存の芸術社会学的アプローチを検討した。そのなかで芸術を芸術以外の社会的現実の反映としてみる芸術作品の社会反映的アプローチでは、芸術作品の内的現実には背景に押しやられてしまう。これに対して、芸術作品にメッセージがなく、論理的・概念的なものを超えた何かとして捉えるアプローチでは、美学的・瞑想的・観照的にしか芸術作品を分析できず、その社会性が欠落してしまう。したがってメッセージのない芸術作品ということ的前提にしつつ、それと同時に芸術作品の社会性を明らかにすることのできる理論が必要であると筆者は主張した。

第2章では、そのためにN・ルーマンの社会システム理論を検討した。送り手が、何らかの情報を伝達していなかったとしても、受け手が何かを伝えていると「理解」するのならば、コミュニケーションは成立するという彼の理論を用いることで、メッセージのない芸術作品をコミュニケーションとして扱うことができる。さらにルーマンによれば、「システム」は「環境」との「差異 (Differenz)」, つまり様々な他の社会領域においては実現できない固有の社会的機能を獲得することによって成立するのであり、芸術システムにとってその機能は、「可能性」と「秩序」のなかでパラドキシカルなコミュニケーションを永続的に展開することで、固有の自律的な社会システムとして分化 (Differenzierung) する。さらに社会システム理論研究者のヴェルバーは、このようなパラドックスの展開は、余暇の増大とともに生じた「娯楽」という欲求のもとで生じたことを指摘し、ルーマン理論を補足した。ヴェルバーの理論的帰結として、余暇のなかで功利性や利便性、意味のないことを観察したいという人々の欲求を解決するために、芸術システムは分化したのである。

上記の理論を使って、東ドイツのアンダーグラウンド文学が成立した条件について、第3章ではアンダーグラウンド文学を取り巻く東ドイツの社会的環境について、「分化」の観点から記述を行った。そのなかで、東ドイツにおいても、緩やかな経済成長とともに労働から解放された娯楽や芸術（音楽）への欲求は高まっていたが、「労働社会」であることを誇りとする国家や政府は、このような欲求を絶えず抑圧していた。さらに経済的にもあらゆる産業部門が補助金によって成り立っているために、(文学に必要な紙の輸入を含め) 消

費の増大は、そのまま財政赤字を意味したので抑制されなければならなかった。さらにアンダーグラウンド文学以前の世代の作家たちも、ナチスに対する戦争責任や「ユートピア」思想から、文学を完全には道徳と切り離すことができず、それゆえ道徳者を標榜する政府に対して批判的になることもできなかった。つまり東ドイツにおいては、専門的な芸術システムの自律化は、政治的・経済的・文学的に阻害されていた。

第4章では、このような社会的制約にも関わらず、いかにアンダーグラウンド文学は、自律的な芸術システムを作り上げたのかという問いを、芸術内部のシステムにとって有効な様々な規則を記述することで明らかにした。文学に対する制約は、1980年代の若い作家たちにとって、文学や芸術への動機づけを減退させるというよりも、ますます文学や芸術へと動機づける契機となっていることがわかった。彼らは自分たちに課される制約を「沈黙」として表現することで、(政治的な)抗議の可能性を追求するのではなく、政治的現実そのものを「つまらない」ものと判断を下すが、このことは「おもしろい」ものに対する興味をを作りあげ、芸術に対する関心を高める。自由な言論が政治的に制約されている「沈黙」という状況は、「感情」や「幻想」といった言葉にならない言葉表現するための重要なチャンスになるのである。こうして他の社会領域には還元することのできない独自の興味関心が成立することになる。このような興味のもとでは、いまやあらゆる対象が「おもしろい／つまらない」かのいずれかでしかないのである。「楽しい／楽しくない」というこの二値コードは、コミュニケーションを政治的・経済的にではなく芸術的に動機づけるのである。このような動機のもとでの作品制作のために、作家たちは「言葉遊び」という文法的規則を用いる。「言葉遊び」とは、何か言葉を発しているが、それが単なる遊びにしか過ぎないという意味で作品からメッセージの読み込みを不可能にするためのアンダーグラウンド文学独自の方法である。「言葉遊び」のもとでは、(作品のなかで)何かを述べているが、(言葉遊びゆえに)何も述べていないという芸術固有のパラドックスが展開可能になるのである。このことによって、政治的言説としては読み込まれることなく芸術作品が制作・鑑賞可能になる自律した芸術システムが成立したのであり、つまり何が芸術であり何が芸術でないか、その「内／外」の境界が確定したのである。

人々が芸術へと参与する条件は、マクロな社会水準から眺めれば、自由な時間・消費を必要とする社会階層の増大によって説明することができるであろう。しかし、ミクロな、つまり芸術内部の水準に目を転じてみれば、他の社会領域には代替できない独自の動機づけ・二値的な認識枠組み・表現方法を確立することによって芸術を制作・鑑賞するための条件が成立することになる。東ドイツのアンダーグラウンド文学という事例から明らかにしたことは、メッセージや意図の見えない芸術作品は、たんに社会的現実の直接的な反映ではないということである。芸術システムは自ら固有の規則を展開することによって、外部から来る社会的圧力を作家たちが創作する動機へと転換するのである。この点にこそ、あたかも社会から独立しているようにみえる芸術が、社会との関連で成立する条件がある。